日本アディクション看護学会

News Letter　第16号

2010年11月20日　発行

日本アディクション看護学会事務局

日本アディクション看護学会第９回学術大会を終えて

第９回学術大会大会長　大澤　栄（北海道文教大学）

日本アディクション看護学会第９回学術大会を恙無く終える事ができました事をここにご報告させて頂きます。

基調講演：札幌医大 齋藤利和教授

思えばこの２年間というものは（プレ講演会を開催して準備に入った期間と実際に大会長をお引き受けしていた期間)、北海道内を駆け回り面識のない方の所に赴き、アディクション看護学会を開催するための協力の取り付けや連携を図る意味でのお話しを随分させて頂きました。

現場の職能集団の協力なくして地方での大会の成功はないという強い信念から、まずは日本精神科看護技術協会北海道支部とコンタクトを取り、挨拶に伺いました。頂いた返事は名義後援という形で間接的な協力であれば惜しまないが、共催は難しいというものでありました。

そこで日本アルコール看護研究会北海道支部に協力要請をして行く中で、北海道文教大学との共催という形で、実行委員会方式ならば協力が可能という返事を頂く事が出来たのでありました。

しかしながら北海道という地方は、何と言っても広大な面積を有しており、実行委員会を開催するのにも、東京で行う

ように集まり易い環境ではありませんでした。そんな毎月実行委員会を開催する事は出来ない状況の中で、モチベーションを維持・持続する事の難しさを知らされ、又それゆえにどのようにすれば関係者との連携が確保されるものかという実験をする事にもなったように今となっては振り返る事が出来ると考えられます。

以上の経緯の中で準備がされてきた事になるでしょう。開催に際してのメインテーマは、川越大会からの継続として「アディクション看護の課題」を頂きサブタイトルに「当事者の為の退院促進支援とは」を入れる事になりました。北海道にはご存知のように“浦河べてるの家”があり、当事者研究は勿論の事、退院促進支援でも全国に名をとどろかせている施設でもあるので、この機会にアディクションだけに特化しないで、広く精神医療を見直す機会になればと考えた訳でありました。

11 月 6 日（土曜日）経過

基調講演：札幌医科大学齋藤利和先生「アルコール依存症の今日的課題」

疾病概念としての用語の使われ方について考察が行われ、治療についてはアメリカの例をあげて治療活動と自助グループ活動の統合を目指す動きがある事などが紹介されました。

シンポジウム：「北海道における退院促進事業の現状と課題」

顔を揃えてくださった

シンポジストの方々

スーパーバイザー	札幌市立大学	守村　洋
シンポジスト	地域生活支援センター　さっぽろ相談支援専門員	伊藤光治
シンポジスト	就業・生活応援プラザ　とねっとセンター長	重泉敏聖
シンポジスト	札幌べてるの集い	当事者
シンポジスト	札幌べてるの集い	当事者

守村洋先生から全国の概況や北海道の概況が述べたれた後に、主に札幌圏で展開されているモデル事業としの退院促進について、シンポジストから報告が行われました。

講演を聴いていて感銘を覚えたのは、

当事者研究としてご自身の就労を捉えて、体調管理をしている当事者からの報告でありました。勿論サービスの充実は当然必要なのだろうが、当事者自身が立っている立ち位置を理解する事が退院促進の重要な部分である事を今更ながら突きつけられた思いがした時間であったと思われます。

懇親会の賑わい（大学食堂にて）

浦河べてるの家　パンチングローブミニコンサート（学生食堂）

初日のプログラムを締めくくる意味で、大学食堂では、浦河べてるの家から CD デビューしているパンチングローブを招いてミニコンサートを鑑賞しながらの懇親会が開催されました。当初の予想を上回って 70 名ほどの参加者が顔を揃えた格好になりました。北海道の魚介類や美酒に酔い、なかなか聞く機会のない当事者の肉声にも心打たれたひと時を過ごされたのではなかったかと思われます。

11 月 7 日（日曜日）経過

教育講演：北海道医療大学向谷地生良先生「技法―ふるまいとしてのケア」

まずご自分が浦河赤十字病院にソーシャルワーカーとして勤務した時代の、港町浦河におけるアルコール問題、アイヌ問題などが語られ、その当時から虐待や DV の問題は内包されていたし、アルコール問題に鍛えられた経験から当事者研究は誕生したという秘話が語られた。そして関係者が行うケアは、基本的には援助しない事が援助であって、これまでの援助は当事者の自立を奪いこそすれ、助けるものにはなり得ていなかった事が切々と語られ、会場はあっという間に“向谷地ワールド”に変換されていったようでした。そして様々な事例が話題提供された上で、「精神医療の危機の突破口は、病としての依存症に向き合う専門家の“無力さ”という立ち位置であり、仲間の力である」と言葉を結ばれたのが深く印象に残った講演でありました。

《一般演題Ⅰ群、Ⅱ群》

双方を合わせて 14 題が発表され、獨協医大看護学部日下修一先生、秋田大学大学院医学系研究科米山奈奈子先生がそれぞれ座長を務められ、フロアとの活発な質疑応答を聴く事が出来ました。

《分科会①～⑦》

会場を 4 会場、⑦分科会を設定して以下のような展開が行われ、活発な議論が行われました。

分科会①「浦河べてるの家　当事者研究の取り組みから」向谷地悦子先生他

分科会②「家族のエンパワーメント：家族全体の健康度を高め支えられる支援とは？」新納美美（札幌市立大学）

話題提供：岡島さおり先生（札幌市北区保健福祉部保健福祉課）、高橋陽介先生（旭山病院医療相談室）、望月和代先生（札幌保護観察所社会復帰調整官）

分科会③「アディクション看護教育」松下年子先生（埼玉医科大学）話題提供米山奈奈子先生（秋田大学大学院）

分科会④「アディクションの陰に潜む不安障害」　坂元薫先生（東京女子医科大学病院神経精神科）

分科会⑤「多問題を抱える若年依存症者の地域生活支援」大嶋栄子先生（NPO 法人リカバリー代表）

分科会⑥「精神障がい回復者クラブとアディクション問題」奥村宣久先生（北海道文教大学）

分科会⑦「アディクション看護の研究方法」日下修一先生（獨協医大）

分科会①「浦河べてるの家
当事者研究の取り組みから」

分科会③「アディクション看護教育」

分科会⑤「多問題を抱える若年依存症者
の地域生活支援」

分科会⑥「精神障がい回復者クラブとアディクション」

全ての分科会の内容についてレポートする事は困難であるが、駆け足で見て回った会場について印象を述べれば、分科会①「浦河べてるの家　当事者研究の取り組みから」では、いわゆる当事者が自らの病気の問題点を分析して、ありたい自分との距離を縮めようとしている姿が印象的であり、研究の進め方について向谷地悦子先生が当事者とのロールプレイの中で解説されておられ大変判り易い内容で構成されておりました。

分科会③「アディクション看護教育」のところでは、学校保健現場など多くの領域を超えたセクションからのニーズがあり、出前講義や共同研究など活動の範囲は広がっている事が報告されていたようでありました。

分科会⑤「多問題を抱える若年依存症者の地域生活支援」のところでは、若年依存症に対するとらえ方として、35 歳未満（1975 年以降、バブル期に小～中学校生、ロスジェネ世代）、生活体験の乏しさ（均質性、学校至上主義、群れる場の減少）が指摘され、この傾向は薬物乱用などに陥る前から存在していて、医学的治療から自助グループへの支援の流れには「乗りづらい」、医療や当事者の相互援助グループではほどけないほどに、絡まってしまった問題群を抱える若年依存症者への有効な援助手段とはどのようなものかが語られ、居場所の確保（話を聞いてほしい）、生活の行き詰まり（関わって守ってほしい）、社会性の獲得（教えてほしい）というように年齢が高くなるのに沿って援助が特徴付けられる事が判って来たという事でありました。

新しい視座がどんどん必要とされている中で、それに遅れないようにわれわれ関係者も学びを深めなければならない事が見えてきた講演内容であったと思われます。

9 回大会メイン会場に使われた（北海道文教大学本館）

《第 10 回学術大会のお知らせ》

第９回大会会場で行われた総会の席で、次期大会長は筑波大学大学院人間総合科学研究科看護学専攻教授（精神看護学）森　千鶴先生に決定されました。

森次期大会長からも会場に向けてご挨拶がありました。

開催時期は 2011 年 10 月 1 日（土）10 月 2 日（日）という事で報告がありました（詳細な内容については、次回のニューズ・レターで報告がされる事になると思われます）。

更　新　情　報

アディクション看護学会研修会　　（事例検討会）

ご案内テーマ：「外来ならではの、アディクションケア」

開催日　：平成 22 年 12 月 10 日（金）

時間　：　14 時 00 分～17 時 00 分

場所　：　東京都豊島区西池袋 1-2-6

トータルケア池袋３F 大会議室

＊　申し込み方法

下記 E-mail または FAX にて、

山口（榎本クリニック）までご連絡ください。

担当者（連絡先）

山口　恵(榎本クリニック)

日本アディクション看護学会企画委員

連絡先

E-mail　　info@enomoto-clinic.jp

FAX　　03-3982-5090

榎本クリニック

http://www.enomoto-clinic.jp/

《学会事務局便り》

2012 年度から事務局担当が変更されます。

事務局長：丸山昭子（埼玉医科大学）

事務局：大澤優子（埼玉医科大学）

広報･渉外：宇賀神恵理（埼玉医科大学）

広報・会報編集・会計・会員管理：荒木とも子（埼玉医科大学大学院）

【事務局所在地】

〒350－1241

埼玉県日高市山根 1397－1

埼玉医科大学　保健医療学部

看護学科 松下年子研究室

日本アディクション看護学会事務局

℡　042－984－4925（丸山昭子直通）

Fax 042－984－4804

【事務局 e-mail】

maruyama@saitama-med.ac.jp

《編集後記》

前事務局長日下修一先生からニューズ・レター編集長を引き継いで随分長い期間担当をさせて頂きましたが、今年度をもって交代する事になりました。安田理事長時代からなので思い出深いものがございます。今後も広報には関わらせて頂きますが、少し充電期間を持ちたいと考えております。

全国の会員の皆様から頂きました温かいご支援に深く感謝しお礼とさせて頂きます。次号よりニューズ・レター編集長は荒木とも子先生に代わります。

（編集長：北海道文教大学
人間科学部看護学科 大澤 栄）

《　事務局からお知らせ　》

入会申し込み・学会費未納の方は、振込用紙をホームページからダウンロードしてご使用ください。

http://plaza.umin.ac.jp/~jaddictn/

現在会員数:293 名　　施設数 163 名

(2011.11.20 現在)

日本アディクション看護学会補助機関誌

ニューズ・レター　第 16 号

発行：平成 22 年 11 月 20 日

編集長：大澤　栄

発行者：丸山　昭子

日本アディクション看護学会事務局